

34 箏の音色（2021年2月16日）

日本の伝統的な楽器の一つに箏（こと）があります。箏の音色を聴かれたことがあるでしょうか？

箏奏者のみやざきみえこさんは、フランスを拠点に各地で演奏活動を行っています。みやざきさんは、三味線や尺八といった和楽器との合奏だけでなく、ピアノやオーケストラと共演したり、ヨーロッパの作曲家が作曲した曲を演奏したりするなど、箏と西洋音楽とのコラボレーションにも積極的に取り組んでいらっしゃいます。



Photo: Dana Daniela Roman

みやざきさんが演奏されたゴルトベルク変奏曲のCDを聴いたときに、まるでチェンバロの音色を聴いているように感じました。ヨハン・セバスチャン・バッハが作曲したこの変奏曲は、チェンバロのために作曲された曲です。箏の音色が、ヨーロッパで西洋楽器のために作曲された曲とこれほどよく合うとは想像していませんでした。



Photo: Dana Daniela Roman

箏は、8世紀に中国から日本へ伝えられて発展してきた楽器です。木製の長い胴に一般的には13本の弦を張り、それぞれの弦に柱（じ）と呼ばれるブリッジを立てて音程を決めます。そして、箏爪（ことづめ）と言われる箏の演奏用の爪をはめて、弦を弾いて音を出します。箏もチェンバロやピアノといった鍵盤楽器も、弦が使われています。世界の楽器を大きく弦楽器、管楽器、打楽器に分けると、箏もチェンバロやピアノも同じ弦楽器に分類されます。

19世紀後半から始まった明治時代に、西洋から新しい楽器が日本に入ってきました。当時の人たちはピアノには西洋の箏を意味する漢字を当てはめて、「洋琴」と呼びました。私は、箏は和楽器で、ピアノは西洋楽器と分けて考えていたので、全く形が異なる箏とピアノに共通点があることに気が付きませんでした。しかし、ピアノを初めて見た明治時代の日本人は、漢字を使って新しい楽器を説明するために、自分たちが知っている楽器との共通点を探したのかもしれない。

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

和楽器と西洋楽器は、異なる場所で別々に発展してきた歴史があります。しかし、双方には共通点があり、異なる楽器間のコラボレーションにはまだまだ多くの可能性が秘められています。箏の音色をまだ聴いたことがない方は、ぜひ一度箏の演奏を聴いて、新たな世界を楽しんでいただきたいです。